

## 第IV章 まとめ

今回の調査では、縄文時代中期および後期の縄文土器片が出土した。津和田第2遺跡は宮崎平野南部の海岸沿いに形成された砂丘状微高地の上に立地する。宮崎平野南部で同様の立地環境に位置する縄文時代遺跡には、青島周辺の松添遺跡、右葛ヶ迫遺跡、納屋向遺跡や、一つ瀬川下流域にある樋ノ口遺跡がある。

これらの遺跡の共通点として、丘陵に近いあるいは丘陵直下付近にある微高地上に立地すること、遺跡の中心となる時期が縄文時代中期後葉以降であることがあげられる。遺跡の立地する微高地は、縄文時代中期の海退によって陸地化した地域にあたるものと考えられるが、上記のような遺跡の分布状況には、こうした土地を新たな生活域として選択した人々の動きを見出すことができる。松添遺跡からは、海棲動物や陸棲動物のいずれもが出土していることから、海、山いずれにも近く、多くの資源を獲得できる環境が生活適地として利用されたのであろう。

弥生時代から古墳時代の遺構は堅穴建物、周溝状遺構、土坑、ピットが確認された。津和田第2遺跡で確認された当該時期の遺構はおおむね弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけてのものと考えられる。近隣では赤江飛行場（現宮崎ブーゲンビリア空港）建設の際に同時期の遺物が多く採集されていることから、周辺に広がる砂丘状地形上一帯には人々の生活域が存在していたものと想定されていたものの、その様相が明らかでなかった。今回調査で明確な遺構が確認されたことは、当時の様相の一端を知るための成果と言えるであろう。砂丘状地形や、その周辺に複数の周溝状遺構が存在する状況は、宮崎市域では花ヶ島町の桜町遺跡、阿波岐原町の中須遺跡と類似する。大淀川を挟んだ南北で同様の環境下に様相の似た生活域、集落域が展開していたものとみられる。

古代の遺構は井戸とみられる土坑1、用途不明の土坑49の2基の土坑が確認された。そのほかにも、埋土の特徴から古代に属するとみられるピットも散見される。出土遺物から、およそ9世紀後半～10世紀前半に位置付けられる遺構と思われる。井戸の存在から周辺に当該時期の生活域が広がっていたものと想定できるものの、その様相については明確ではない。ただし、土坑1から金属加工工具とみられる石器が出土しており、金属製品生産が近隣でおこなわれていたものと考えられる。また、緑釉陶器や灰釉陶器と思しき土器片が出土していること、大淀川河口に近い八重川に面した砂丘状地形上という立地から、広域交流に関わる集団が存在していた可能性も考慮しておく必要がある。大正年間の新聞には津和田において多くの輸入陶磁片が採集されているとの記事もある。

近世の遺構については6条の溝状遺構と4基の土坑墓、2基の土坑が確認された。まとまった数の土坑墓が存在することから、近世においては当地が墓域として利用されていたと考えられる。

4基確認された土坑墓は、形態的にいずれも平面長方形で箱型のもの（土坑墓6、7、8、55）、土坑墓の可能性がある土坑は、隅丸長方形のもの（土坑墓46）、小型で平面円形のもの（土坑墓3）に分けられた。

土坑墓7、8については、木棺材の一部が残存しており、木棺の形態についてわずかながら知見を得ることができた。そのほか、土坑墓7で検出された煙管、火打金、火打石からなる喫煙具一式が注目できる。喫煙具一式が近世墓から検出された事例は、現在のところ本県では本例が唯

一であり、当時の喫煙具の組み合わせや、副葬品の組成を知る上で重要である。喫煙具は煙管の形態から19世紀代の所産と考えられる。

また、今回調査では、1発の銃弾が検出された。銃弾の口径が12.7mmであることから、第2次世界大戦中の米軍の空襲によるものとみられる。第二次世界大戦当時、調査地周辺には赤江飛行場（現宮崎ブルーゲンビリア空港）、戦闘機を格納する掩体壕、第931設営部隊兵舎、呉海軍施設部事務所などの軍関連施設が存在していたことから、周辺は度重なる空襲にさらされている。今回検出された銃弾もそのいずれかの際に放たれた可能性が高いものだろう。まさに今回調査地が空襲被害を受けたことを示す物証の一つである。

#### 参考文献

- 「赤江　あの日あの頃」編集委員会編 2010『赤江　あの日あの頃』赤江ふるさと塾  
石川恒太郎編 1964『赤江郷土史』赤江振興会  
江戸遺跡研究会編 2001『図説　江戸考古学研究事典』柏書房  
宮崎県編 1993『宮崎県史　考古1』宮崎県  
宮崎県編 2000『宮崎県史　通史編　近・現代2』宮崎県  
宮崎市教育委員会編 2014『下鶴遺跡』宮崎市文化財調査報告第101集　宮崎市教育委員会  
坂上康俊ほか 1999『宮崎県の歴史』山川出版社